１　視察先及び調査事項

（１）諫早市（１０月２３日）

〇諫早市美術・歴史館について

（２）姫路市（１０月２４日）

〇観光戦略プラン・観光振興について

２　視察結果

（１）諫早市

人　口：１３１,２３１人
世帯数：５５，２２９世帯
面　積：３４１．７９ｋ㎡
（令和６年１０月１日現在）

【市の概要】

諫早市は長崎県の中央に位置する都市であり、東は干潟の有明海、西は内海の大村湾、南は外海の橘湾という特性の異なる３つの海に面し、多良山系の山々や、市中央部を流れる県内唯一の一級河川である本明川とその下流の広大な干拓地など、豊かで多様な自然環境に恵まれている。また、市内には４本の国道、長崎自動車道、ＪＲ、島原鉄道が通っており、長崎市、島原半島、大村東彼及び佐賀鹿島方面を結ぶ交通の要衝となっている。

また、４００年以上前からの干拓により形成された諫早平野は県下最大の穀倉地帯であり、肥沃な丘陵地帯は野菜やみかんの特産地となっている。さらに、県内有数の産業集積拠点である工業団地を有し、製造品出荷額は長崎県下第２位となっている。

平成１７年３月１日には、多良見町、森山町、飯盛町、高来町、小長井町と合併し、将来都市像として「ひとが輝く創造都市・諫早」の実現を目指したまちづくりを進めている。

〇諫早市美術・歴史館について

・施設概要について

諫早市美術・歴史館は、平成２６年３月１日に開館した美術館及び博物館を用途とする施設である。総工費は約１２億５，０００万円で、ホール、常設展示室、企画展示室のほか、研修室や和室などもあり、貸館機能も備えている。

設置目的については、諫早市美術・歴史館条例において、「本市にゆかりのある美術、歴史、民俗等に関する資料を収集し、保管し、展示し、及び調査研究して市民等の利用に供するとともに、市民に美術作品及び歴史、民俗等に関する調査研究等の成果の発表の機会を提供することにより、市民の文化の発展に寄与し、併せて地域の振興に資するため」とされている。

・基本理念と基本的な性格について

基本理念として、諫早全体の歴史や文化、自然環境などを一覧できるとともに貴重な歴史遺産の保存継承を行うことにより、市民や来訪者が郷土「諫早」を理解し、親しみ、愛着を育てる場とすること。また、周辺に点在する様々な歴史的、文化的な遺産や豊かな自然、図書館などの公共施設と連携し、市全体を１つの「エコミュージアム」と捉え、これを総合的に結びつける交流拠点とすること。さらには、県展をはじめ市民作品の発表の場として文化芸術活動の振興を図ることなどにより、諫早公園を中心に「歴史と文化の薫りがするまち」を形成し、新たな諫早の魅力づくりに寄与することがうたわれている。

加えて、「学び・発見する施設」「参加・体験する施設」「継承する施設」「思い交流する施設」「連携・発信する施設」の５つの基本的性格を有した施設と位置付けられている。

・運営体制について

市の直営により運営されており、文化行政はもともと教育委員会の所管であったが、この施設の開館に伴い平成２６年に市長部局に移管された後、令和５年度にさらに機構改革が行われ、現在の経済交流部文化振興課の所管となった。正規職員は３名で、うち１名が学芸員、会計年度任用職員は８名で、うち３名が学芸員という職員体制である。

・常設展示について

常設展示は以下の４つの展示空間で構成されている。

① 諫早の変遷

いさはやデジタル年表では、時代パネルにタッチすると原始から現代までの詳しい情報が表示される。

いさはやまるごとマップでは、床面に投影された「遺跡分布図」「古地図」「干拓地の広がり」「指定文化財分布図」の４種類の映像を足で操作することで、詳しい情報を表示することができる。

② 諫早の歴史

諫早で発見・発掘された出土品や実物資料、解説パネルなどにより、諫早の古代から近現代までの歴史を紹介している。特に「諫早眼鏡橋」については、現在の架橋に至る経緯を分かりやすく解説している。

③ 諫早の美

諫早ゆかりの絵画や書、工芸品を展示している。

毎年４月初旬から５月下旬まで、北側の内壁を移動させ、ガラス面とすることで、自然光と周辺環境の新緑を借景にした展示を実施しており、他の博物館にない特徴的な展示である。

④ 諫早歴史学習コーナー

昔の人々が実際に使っていた民具や農具を展示しており、小学３年生の副読本と連携したコーナーである。

郷土芸能の映像が流れており、２０分の１サイズの眼鏡橋の模型は、子どもが組み立てて渡ることができるなど、「見て」「感じて」「学んで」諫早の歴史の息吹を感じることができる空間を創出している。

・教育普及事業について

館長講座をはじめとした各種講座を実施しているほか、史跡見学として、市内各地における寺社巡りや、市内の各小学校区における史跡巡りを実施しており、昨年度には開館１０周年記念企画展「諫早の酒造り展」の一環として、諫早の酒造りにまつわる史跡などを巡るバスツアーを開催した。

令和４年度からの新たな取組として、「美歴こどもＷＥＥＫ」を実施しており、子どもたちが体験を通して楽しみながら歴史や芸術などへの興味、関心を高め、美術・歴史館に親しみを持つことができるイベントとして好評を博している。昨年度においては、ゴールデンウイークの３連休に、市内の様々な団体と連携・協力して実施され、「甲冑体験」では、諫早高城会より寄附された諫早家由来の

甲冑を基に製作した子ども向け甲冑を初公開し、子どもが甲冑を着て記念撮影会を行った。

・１０周年記念事業について

① 諫早の美術家展

諫早の美術家の作品を一堂に展示することにより、郷土作家作品の鑑賞機会を創出するとともに「文化芸術のまち・いさはや」を市内外にアピールした。

② ウルトラ空想特撮ワールド―ウルトラマンと夢見る未来―

諫早市出身の脚本家、市川森一ゆかりのウルトラマン関連の展示やワークショップを通して、子どもたちが「何かを空想する、自由に夢見るって楽しい！」と感じる機会を創出するとともに、関連イベントとして高校生が想像して描いた怪獣たちが市内の１３スポットで諫早の謎や歴史のクイズを出題する「ウルトラクイズラリー」を開催し、親子で諫早の歴史を勉強してもらうきっかけづくりを行った。また、ウルトラマングッズや諫早オリジナルグッズ、諫早市の観光物産をＰＲするコーナーも設置した。

③ 諫早の酒造り展

館所属の主任専門員の調査研究結果を基に、諫早の酒造りに関するパネル資料や酒だる、徳利などの道具を展示した。

④ 野口彌太郎展

諫早ゆかりの洋画家、野口彌太郎の作品の中から、美術館等で展示される機会の少ない個人所有の作品を中心に展示することで、郷土ゆかりの洋画家のさらなる顕彰を行った。

・所見

諫早市美術・歴史館は、地域に愛される施設として、昨年度開館１０周年を迎えた。実際に視察に伺った日も、平日午前にもかかわらず多くの人が訪れており、館への愛着や地域の文化・芸術への関心の高さが窺えた。

開館から１０年が経過しているということで、観覧者が自分で操作できるデジタル展示の反応が悪くなっていることは課題とされていたが、その機能自体は館の魅力を高めることに有効であるとともに、ＤＸ化を推進している社会情勢に沿っているため、本市歴史博物館のリニューアルにおいても、積極的に取り入れていくべきものであると思われた。

また、諫早歴史学習コーナーにおいて、市を代表する文化財である眼鏡橋の

構造を模したブロックが置かれており、子どもが実際に触って学べるような体験型の展示も参考となるところであった。

さらに、期間外であったため実際に見ることはできなかったが、展示室の壁の一部を移動させガラス面にできる構造になっており、移動させることにより自然光と周辺環境の新緑を借景にした展示を実施しているとのことで、公園と一体となって施設整備を進める本市にも参考にできる部分があるのではないかと感じた。

教育普及事業においては、「諫早の酒造り展」の一環として行われたバスツアーや「美歴こどもＷＥＥＫ」の甲冑体験など、市内の様々な企業・団体と連携・協力して実施された取組があり、本市歴史博物館においても岐阜和傘の展覧会を実施するなど既に実現している部分もあるが、地域文化・産業振興のためにもさらなる官民連携による事業の実現が望まれるところである。

１０周年記念事業の１つである「諫早の美術家展」は、美術家の方々からの熱い思いや寄附活動により実現した展覧会で、観覧者からも好評を博したとのことであった。展示に出身地区名が表示されており、市内の観覧者は地元の美術家の作品であることを意識しながら鑑賞することができるため、シビックプライドの醸成に大きく寄与する取組であると感じた。

また、「ウルトラ空想特撮ワールド」では、市内の高校生の作品を使って、資料館をはじめとした市の歴史などが学べる１３か所の施設を子どもたちが周るという、地域一体となった取組がなされており、ウルトラマンという地名度が高い作品を使って、多くの人々に諫早の歴史や文化、産業に触れる機会を提供している点で非常に有意義な取組であると感じた。

本市歴史博物館は令和８年度を目標に総合展示室のリニューアルを予定しており、諫早市美術・歴史館の設備やそこで行われている多様な取組はハード面からもソフト面からも大変参考となるものであった。

（２）姫路市

人　口：５１９，３９０人
世帯数：２３１，２０６世帯
面　積：５３４．３５ｋ㎡
（令和６年１０月１日現在）

【市の概要】

姫路市は、明治２２年の市政施行以来、数次にわたり周辺地域を編入して市域を拡大し、商工業都市として発展してきた。

平成８年４月に中核市に指定され、平成１８年３月には合併により人口５３万人余りに達し、播磨地域の中核都市として揺るぎない地位を築いている。

また、平成２６年６月には全国に先駆けて国に提唱し実現に至った連携中枢都市のモデル都市に選定され、平成２７年２月に連携中枢都市宣言を行い、近隣市町と連携協約を締結し、播磨圏域全体の経済成長の牽引、高次都市機能の集積などに取り組んでいる。

〇観光戦略プラン・観光振興について

・姫路市観光戦略プランについて

姫路市観光戦略プランは、「観光を通して、にぎわいと感動にあふれるまち姫路」という将来像を目指し、５つの戦略とそれを実現するための４つの視点を掲げている。

戦略は、①観光コンテンツの磨き上げによる魅力向上、②観光客のニーズを踏まえた受入環境の整備、③効果的なプロモーションによる誘客推進、④国際会議観光都市・ＭＩＣＥ都市の推進、⑤観光を活かした産業振興・地域づくりの推進の５つである。

視点は、①デジタル技術の有効活用、②ＳＤＧｓ・持続可能な社会への貢献、③大阪・関西万博との連携・活用、④ＤＭＯによる観光地域づくりの４つである。

・姫路市の観光における課題について

姫路市の観光における課題は、姫路城以外の観光施設などの認知度が相対的に低く回遊性が低いこと、観光宿泊客、滞在時間、観光消費額が少ないこと、ストレスフリーな受入環境整備の遅れ、市内二次交通網の不足などがある。

・「観光地域づくり」について

姫路市では、地域ＤＭＯである公益社団法人姫路観光コンベンションビューローを核として「観光地域づくり」を進めている。「観光地域づくり」とは、「観光地づくり」と異なり、地域の課題を観光によって解決しようとするものである。地域づくりという言葉からも分かるように観光客にとって魅力的であるだけではなく、地元住民にとっても住みやすい地域であることが必要であり、観光をツールとしてどのようなまち・地域をつくるのかを考えていく取組である。

・戦略ごとの施策について

① 観光コンテンツの磨き上げによる魅力向上

姫路城生きた歴史体感プログラム（リビングヒストリー）として、千姫・忠刻体験や姫路城歴史体験、姫路大名行列など、姫路の歴史文化に触れることのできるソフト資産の充実等をコンセプトとして、シビックプライドの醸成や地域への愛着につながる事業を行っている。

姫路城カップルフォトプランは、千姫と本多忠刻夫妻の復元着物を着用し、非公開箇所を含めた姫路城内４か所で記念撮影ができる姫路市独自の特別なプランで、販売開始４分で完売するなど大変な人気コンテンツとなっている。

また、観光宿泊客を呼び込むために夜間のコンテンツにも力を入れており、姫路城プレミアムナイトツアーやライトアップイベント、Ｈｉｍｅｊｉ大手前通りイルミネーションなどを実施している。

さらに、戦略を実現するための視点にもあるデジタル技術を有効活用した取組として、世界遺産姫路城ＶＲ、姫路城大発見アプリ、姫路城ＶＲ謎解きイベントを行っている。

② 観光客のニーズを踏まえた受入環境の整備

地域一体となった観光地の付加価値化事業として、姫路観光コンベンションビューローが観光地域づくりの司令塔となり、観光地経営のマスタープランとなる地域計画の構築・磨き上げや、収益率向上のための宿泊施設の改修、観光客の利便性向上のための観光施設の改修、景観改善等につながる廃屋の撤去、デジタルデータの収集・分析・利活用により消費拡大や再来訪促進等を図り生産性を高めることを目的とした面的ＤＸなど、地域・産業の「稼ぐ力」を回復・強化するための取組を進めている。

また、おもてなしクーポンとして、市内の施設・飲食店・土産店・体験・サービス業等の事業者から、割引や追加サービスなどの特典を募り、電子

クーポンとして広く提供する取組も行っている。この取組では利用者の性別、年齢、居住地、店舗ごとの利用実績等のデータ収集が可能であるため、これをさらなる観光施策の展開に活用することが検討されている。

このほか、姫路城パンフレット、解説看板、公式ウェブサイトの多言語化を進めており、姫路城では訪日観光客向け英語定時ガイドツアーを毎日行っている。

③ 効果的なプロモーションの展開

昨年、世界遺産登録３０周年を迎えた姫路城の記念事業として、平成中村座姫路城公演や英国ロイヤルバレエ団、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団などの公演を行い、国内外に向けて姫路の魅力を発信し、祝賀ムードの醸成とともに、インバウンドをはじめとした誘客を図った。

また、ＤＭＯの取組として、ＳＮＳを活用した個人客向けデジタルプロモーション、旅行会社へのセールスや商談会への出展等を行うＢｔｏＢプロモーション、広域連携ＤＭＯや地域連携ＤＭＯとの広域連携によるプロモーションを行っている。

④ 国際会議観光都市・ＭＩＣＥの都市の推進

高い経済効果や都市としての知名度アップなどを狙ってＭＩＣＥ誘致にも力を入れており、令和３年９月に大規模多機能型コンベンション施設「アクリエひめじ」を開館するとともに、ユニークベニューＨＩＭＥＪＩプランとして、姫路城や美術館などの文化施設等をレセプションや記念式典で使用することにより、特別感や地域特性を演出できるプランを提供している。

・所見

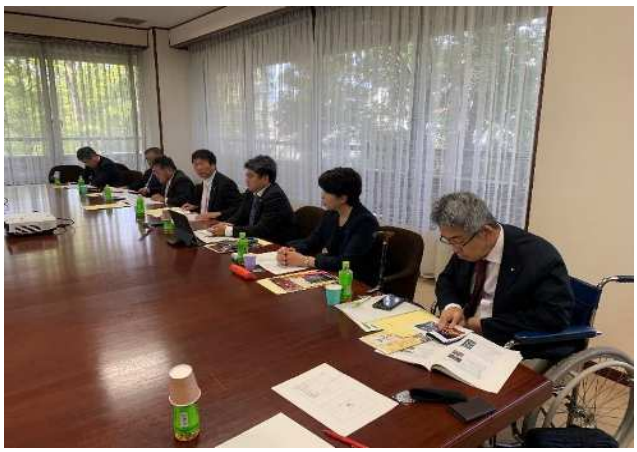
姫路市では、令和４年度に策定された観光戦略プランに基づいて、世界遺産である姫路城を中心とした様々な観光施策に取り組んでいる。中でも印象的だったのは姫路城カップルフォトプランで、１組１０万円という高額な価格設定にもかかわらず販売開始４分で完売したとのことであった。本市にも「月と岐阜城」のように写真に関わる魅力的な観光資源が存在しているため、活用法によっては大きな集客や収益が得られるのではないかと思われた。

また、観光地域づくりの司令塔であるＤＭＯにおいても、令和６年３月に観光地経営のマスタープランとなる地域計画「姫路観光コンベンションビューロー観光地マスタープラン」を策定し、民間事業者と一体となって各種事業に取り組んでいるとのことで、ＤＭＯ独自でプランを策定し、それに基づいて事業

を展開している組織体制は、令和５年度に候補ＤＭＯとなった本市観光コンベンション協会が参考とすべきものであると感じた。

しかし、姫路市のＤＭＯにおいても現在の人員体制は不十分であり、事務局３０人のうち市からの派遣が９人いるものの、特にマーケティング部分での専門的な人材が不足しているため観光庁からの人材派遣制度を活用しているとのことであった。また、行政の職員では人事異動があり経験やスキルが継承されにくいことから、ＤＭＯの正規職員を増やすことで市からの派遣職員を段階的に減らしていきたいと考えているということで、この点に関しては、候補ＤＭＯのうちから先を見据えて組織体制を整えておくことが重要であると感じた。

姫路観光コンベンションビューローが登録ＤＭＯとして認定された際は、行政よりも商工会議所などの経済界による働きかけが大きかったとのことであり、登録ＤＭＯ認定においては、市と観光コンベンション協会間の取組だけでなく、関連団体との連携が非常に重要であると再認識することができた。

長崎県諫早市　視察状況（令和6年10月23日）
　諫早市美術・歴史館について

兵庫県姫路市　視察状況（令和6年10月24日）
　観光戦略プラン・観光振興について